

鏑木清方《薄雪》(福富太郎コレクション資料室)について

花田 珠可子 (福岡市美術館)

本発表は、鏑木清方(1878～1972)が大正 7 年(1918)の金鈴社第一回展に出品した《薄雪》に焦点を当てる。清方は幼い頃から芝居を好み歌舞伎を題材とした作品を多数制作し、舞台スケッチや劇評を手掛けるなど芝居と深く関わったが、大坂の飛脚問屋の養子忠兵衛と遊女梅川の心中を描く歌舞伎「恋飛脚大和往来」による本作は、なかでも二人の哀切な表情を描き出し高く評価される代表作の一つである。清方は、本作について中村鴈治郎が忠兵衛、中村福助が梅川を演じた舞台に想を得たと述べる(「最も深い興味を以て書いた作品」大正 6 年)が、舞台をそのまま描いたわけではない。本発表はその図様の成り立ちを検証した上で、清方の画業における本作の位置を考察する。

本作には下絵が二点(大正 6 年、鎌倉市鏑木清方記念美術館)確認できる。下絵には二人の顔の向きや忠兵衛の顔の位置について検討を重ねた様子が看取できるが、その結果、本画の姿となったのは、姿勢は西洋絵画、顔の位置は浮世絵学習によるところが大きいと考えられる。そもそも枯野で雪が舞うなか二人が抱き合う姿は、浮世絵や現行の歌舞伎、文楽にも確認できない。先行研究において、この仕草がラファエル前派の絵画に基づく指摘されるが、本作に先行する、柳川春葉著『女一代』や菊池幽芳著『筆子』の清方の口絵も併せて検討すべきだろう。また、二人が顔を交差させる描写は勝川春章《婦女風俗十二ヶ月図》(MOA 美術館)のうち「十月 炉開図」を参照した可能性が指摘できる。清方はこの作品を明治 40 年頃に実見しその後模写するなど、浮世絵研究を進め、その成果を自作にどのように反映させるかを試行していた。本作には、まさにその成果が反映されている。また、梅川が着る黒紋付の袖に描かれた家紋を、下絵から本画への制作過程で変更している。清方は「芝居衣裳の對小袖も避けて自分の欲するまゝに」(「自作を語る」昭和 46 年)制作したと述べており、二人の帯を雪輪文に揃えたのは、対の衣裳であることと雪が降る情景を連想させるための工夫とみなせる。

明治 40 年の第一回文部省美術展覧会出品《曲亭馬琴》が説明的描写のため落選となって以降、清方は作画姿勢を見直し、浮世絵研究を踏まえた《墨田河舟遊》(大正 3 年、東京国立近代美術館)、舞台に多くをよった《野崎村》(独立行政法人日本芸術文化振興会、大正 3 年)、庭の景と女性との調和を目指した《露の干ぬ間》(名都美術館、大正 5 年)など様々な方向を模索する。そのなかで《薄雪》は、過剰な説明を避け人物と風景との調和を重視し、二人の心情を表情だけでなく背景の風景表現も含めて描き出し、服飾によって芝居の情景を想像させるという新たな達成を示す。すなわち、舞台に想を得ながらも舞台を直接的に描写する芝居絵とは異なる枠組みで男女の恋模様を描き出した意欲作として改めて評価したい。